

以上のことからワイルドは世紀末という時代に敏感に反応したことがわかる。伝統的・因習的なものの考え方には反抗したが、『ドリアン・グレイの肖像』を読むと、ワイルドはある意味でとても倫理的であった。

## ワ イ ル ド の 結 婚

西 村 孝 次

(日本ワイルド協会名誉顧問)

「コンスタンツェは一家の殉教者、姉妹のうち一番ところが温かく、家計のやりくりも心得ています。彼女は最良のころをもっています。ぼくは彼女を衷心から愛していますし、彼女も心底からぼくを愛してくれています」とモーツァルトは妻のことを書いている。だが、おそらく誰もこれを額面どおりには受けとろうとしないであろう。

そして、もしオスカー・ワイルドが妻コンスタンス——このドイツ語はコンスタンツェであるが——について、ウォルフガング・アマデウス・モーツァルトのと同じ手紙を書いていたとしても、その反応は多分似たようなものだったに違いない。およそ天才の妻は悪女なりとの俗説が余りにも固定化しているからである。なるほどクララはシューマンにとって、コジマはワーグナーにとって良妻とはいえなかったし、コンスタンツェ自身も必ずしも理想的もしくは模範的な良妻とは称しがたい点がなくもなかった。しかし、コンスタンス・メアリ・ロイドが聡明で現実的な家庭婦人であったことは、くしくも同じ1983年に出た Anne Clark Amor, *Mrs Oscar Wilde: A Woman of Some Importance* 『なかなかの女』(Sidgwick & Jackson) と Joyce Bentley, *The Importance of Being Constance* 『貞節が肝心』: A Biography of Oscar Wilde's Wife (Robert Hale) の二冊が、それぞれ観点に若干の相違こそあれ、ともに詳しく伝えている。コンスタンツェもコンスタンスも世に喧伝されているような、そんな悪女・悪妻ではなかった。

しかもコンスタンツェ・モーツァルトの9年間の結婚生活が意外なまでに幸福だったのに反し、なぜコンスタンス・ワイルドの14年間のそれは、あれほど不幸な歳月でしかありえなかったのか？

ワイルドは、1874年10月17日から1878年11月28日までの、あの輝かしいオクスフォード大学時代(詳しくは Norman Page, *An Oscar Wilde Chronology*, pp. 3-12 (Macmillan, 1991) の某日もしくは某夜、'Old Jess' と呼ばれる大学生相手の娼婦を抱いて梅毒をうつされた(ちなみに 'Old Joe' とは性病の俗語である)。この事実をリチャード・エル

マン(1918-87)はワイルドの自我像を「一変することになる事件」として重視し、あの記念碑的な伝記『オスカー・ワイルド』(ヘイミッシュ・ハミルトン、1987年)のなかで採りあげている(88-90頁)。すなわち、かれの父サー・ウィリアム(1815-76)は母国アイルランドのみならず広くヨーロッパでもよく知られた眼科および耳鼻科の名医だったが、それだけに却って息子のワイルドは病気、とくに性病というものの恐ろしさと悲惨を見くびりがちであった。だからこそ、この感染はかれに壊滅的のといってよいほどの打撃を与えずにはやまなかった。1870年代、イギリスの医学界は梅毒に罹った者は結婚まで2年待つて水銀療法をうけるべきであるというサー・ジョナサン・ハッチンソン(1828-1913)の勧告を守っていた。「ワイルドにたいする水銀の主たる身体上の効果はかれの出っ歯気味の歯を黒くしたことであり、以来かれは話し中は片手で口を蔽うのを常とした(水銀は梅毒に効かなかった、効くという評判だったのだが)」(89頁)。この時点で、しかしながら、もしこの水銀療法が効を奏してこの忌まわしい悪疾が完治した、との証明がなかったら、かれはコンスタンスと結婚していなかったであろう。たとえ軽佻浮薄の振る舞いを免れなかったとしても、かれは究極において責任感の強い男であった。きれいな体になって、いや、きれいな体になったと確信できたからこそ、かれは結婚したのだ。1885年6月5日に長男シリルが、その翌年11月3日に次男ヴィヴィアンが生まれる。ふたりとも、きれいな体であった。

ところが、ヴィヴィアンの誕生後、はしなくもワイルドは例の疾患が治りきっていないことを知ったのである。このおぞましい発覚のため、かれは「妻との性関係を断たざるをえなくなった」(H.モンゴメリー・ハイド『オスカー・ワイルド』、184頁。ファラー、ストラウス・アンド・ジルー、1975年)。わたしたちとしてはこのハイドの明言を信じるほかない。ただ、「断たざるをえなくなった」という消極的で受身的と解さざるをえないワイルドの立場を、かれについてのあらゆる予見と予想に反して、かれの積極的で能動的な決意と行動と見る自由と信頼は、わたしたちに許されるはずである。もともとワイルドは女を、妻を愛してなどいなかった、かれは生まれつきホモだったのだから、とのPatricia Flanagan Behrendtの*Oscar Wilde: Eros and Aesthetics*(Macmillan, 1991)の主張は、このようなとき、いたずらに軽佻浮薄で無責任なひとりよがりでしかありえない。

1898年4月7日、コンスタンス・メアリ・ロイドは夫姓を名乗ることさえ許されぬまま、ジェノヴァ湾に臨む都市ジェノヴァの療養所で歿した。カムボ・サントの新教徒墓苑に眠る妻の墓を、1899年の2月の末、ワイルドは出獄の身で詣でた。かれが赤い薔薇の花を供えたその墓碑には「勅選弁護士ホラス・ロイドの娘コンスタンス・メアリ」という文字と『ヨハネ黙示録』の一節しか刻まれていなかった。ワイルドの名は削りとられたのではなく最初から除かれていたのだ。そして、そのあとを追うようにして、オスカーも、つぎの年の11月30日、パリの安宿で窮死したのである。